

Ⅱ 表層地質

1 表層地質概説

本図幅地域は尾張丘陵の西縁部とその周辺に広がる台地、その西側に広がる濃尾平野東北部から成り、西は木曾川によって境される。東北隅の山地は固結堆積物であるチャート・砂岩・泥岩から成る中・古生層で構成され、丘陵は主に瀬戸層群から成り、半固結の砂・泥互層、礫層が分布する。

台地を構成する地層は更新世中・後期の地層で、下位より唐山・八事層、熱田層、小牧礫層、鳥居松礫層、大曾根層などに区分される。多くは平坦面をつくって分布し、熱田層の大部分が砂であることを除いて礫層である。一部に粘土層を伴う。このうち、唐山・八事層及び相当層は瀬戸層群と共に、半固結堆積物としてまとめられ、他は未固結堆積物である。

濃尾平野の最上部には、南陽層と呼ぶ沖積層（完新統）が分布する。ボーリング資料、地下工事の時の切取りの観察などによれば、未固結の砂・粘土からなる。さらに下位には未固結～半固結の地層が見られるが、これらは台地・丘陵部で見られた地層の連続である。地表での岩相・層序と多少異なった構成をもつことが多くのボーリング資料の総合によって明らかにされている。

その区分は上位より、南陽層（沖積層）、濃尾層、第一礫層、大曾根層、熱田層（以上更新世後期の地層）、第二礫層、海部層、第三礫層、弥富層（以上更新世中期の地層）、東海層群（瀬戸・常滑・奄芸層群：鮮新世）である。

瀬戸層群及びそれより新しい地層は一般に南西へ傾斜し、下位の地層ほど傾斜が大きい。分布深度は南西側で大きく、さらに西方、図幅外の養老山地東縁部で養老断層によって切られ、中・古生層と接する。各地層の関係をⅡ-1表に示した。

本地域内には、いくつかの骨材採取のための採石場はあるが、鉱山はない。地下水は豊富であり、温泉も1ヶ所で見られる。

II-1 表 地質系統表

地質時代	地質系		地質層		地名	下	おもな岩質	表層地質分類
	地質時代	地質系	地質層	地質層				
新	第四紀	更新世 (沖積世)	南陽層 (沖積層)	濃尾層	礫・砂・粘土	礫・砂・粘土	未固結堆積物	
				第一礫層				
				鳥居松層・大曾根層				
				熱田層				
中生代	白堊紀	鮮新世	八事層・上末層 唐山層	第二礫層	礫	礫・砂・粘土	半固結堆積物	
				海部層				
				第三礫層				
				弥富層				
中生代	白堊紀	鮮新世	瀬戸層群		礫・砂・粘土	礫・砂・粘土	固結堆積物	
			花崗岩質岩	花崗岩				
古生代	シルurian 疊	白堊紀	"秩父古生層" (中・古生層)		チャート・砂岩 粘板岩	チャート・砂岩 粘板岩	固結堆積物	
			花崗岩質岩	花崗岩				

2 表層地質細説

2.1 未固結堆積物

2.1.1 砂・泥を主とする層(S_m)

はんらん平野・三角州堆積物のうち、主に砂からなる自然堤防堆積物を区別した残りのものである。濃尾平野、庄内川・矢田川流域および東側丘陵・台地内の小河川の谷部を埋めて分布する。一般に沖積層と呼ばれる地層で、谷部を埋めるものは分布が小さく、砂、粘土の他、砂礫を伴なう。

主体となる濃尾平野地下の本層は上部の南陽層(沖積層-完新統)と下部の濃尾層(更新統の最上部層)に区分される。南陽層はさらに、主に砂からなる上部砂層と主に粘土からなる下部粘土層に分けられる。上部砂層は最上部に陸成の粘土層を伴うことがある。

上部砂層は北西部の木曾川近くで20 m近くの厚さをもつ。下部粘土層は南西部で地下-40 mに達する開折谷をもち、厚さも20 mを越す。

濃尾層は最終氷期最盛期(約1万8千~1万年前)以降の、海面上昇期の堆積層で、砂、粘土・シルトの互層からなり、主に南部地域の地下に分布する。層厚は5 m前後である。

濃尾層と南陽層 — いわゆる沖積層 — は最終氷期の最盛期(約2万~1万8千年前)までつくられた侵食谷およびそれを埋めた礫層(第一礫層など)の上に分布している。「沖積層」基底等高線図に示されるように、北東から南西へゆるく傾いて深くなる。「名古屋南部」図幅に見られるような著しい埋積谷は本地域内には認められないが、小さい谷地形は存在する。

2.1.2 砂を主とする層(S)

はんらん平野・三角州堆積物のうち、自然堤防・砂州を構成するものを地形をよりどころとして区別した。微高地をつくり、主に細粒の砂からなる。南ほど、そして西ほど細粒になる傾向がある。図上の分布は地形区分に合わせたもので、堆積物の確認を行ったものではない。

2.1.3 砂・礫を主とする層(Sg)

犬山扇状地の扇端部を構成する砂礫層で、2～5 cmの円礫を含む。表層部には一様に、灰褐色～黄褐色の細～中粒の砂層が、1.5～2 mの厚さで全域をおおって分布する。

砂を主とする層(S)および砂・礫を主とする層 また、隣接図幅「岐阜」・「瀬戸」ではこの区分がしてないので、図上の整合性はない。

2.1.4 砂を主とする層(S)

春日井市田楽台地と名古屋市中心部の熱田台地を構成する地層は、主に砂で、時に細礫を混える。クロス・ラミナ(斜交葉理)が発達し、御岳火山に由来する軽石粒を含んでいる。(写真Ⅱ-1)

この砂層は熱田層の最上部を占める地層で、熱田面・田楽面などの平坦面をつくる。



写真Ⅱ-1 熱田層の砂層
(春日井市田楽)

主体となる地層は台地地下、沖積層下に広く分布し、ボーリング資料により確認されている。下部の厚い海成粘土層は北部で10 m、南西部で20～30 mの層厚をもち、砂層を伴なう。上部は薄い粘土層をはさむ砂がちの層で、層厚は一般に20～40 mである。上部層の砂層中に含まる軽石は御岳火山に由来するもので、Pm-I（基底部）とPm-II（中、上部）と呼ばれる。Pm-Iは7～9万年前、Pm-IIは4万年前とされ、熱田層下部が9万年前より前に形成されたもので、関東地方の下末吉層に対比されることを示している。熱田層上部はその年代から、最終氷期の前半の堆積層といえる。

2.1.5 礫を主とする層（g）

更新世後期に形成された礫層を一括したものである。時代の新しい方から鳥居松礫層、大曾根層、小牧礫層、熱田層（礫層）であり、地下では第一礫層がこれに相当する。



写真Ⅱ-2 鳥居松礫層
（春日井市関田町）

鳥居松礫層（写真Ⅱ-2）は春日井市の市街地のある鳥居松段丘をつくる層で、庄内川の旧扇状地礫層である。10 cm以下、ふつう3～5 cmの亜円～亜角礫からなり、礫種はチャートが多く、石英、ホルンフェルス、'石英斑岩'＝（濃飛流紋岩）もある。礫は新鮮で軽い。基質は粗粒砂である。厚さは10 mに達することがある。

ほぼ同時代の礫層と思われる低位段丘堆積層が篠岡丘陵付近および庄内川南岸に見られる。

図幅の南縁に近く、名古屋市大曾根から南へ、熱田台地を2分して礫層が分布する。この大曾根層は旧河床堆積層で、5 cm以下のチャートの亜円礫を主とし、基質は粗砂のことが多い。（写真Ⅱ-3）。層厚は5～6 m、地表ではほとんど見られない。大曾根層の堆積面を大曾根面と呼ぶ。



写真Ⅱ-3 大曾根層
（名古屋市東区長母寺西）

小牧礫層は、鳥居松礫層のつくる鳥居松面より一段高い段丘面——小牧面——をつくる。犬山市楽田の西から、南へ小牧市街をへて春日井市勝川へ、さ

らに東方篠木へかけて分布する。20 cm大の円礫を主とし、数cm大以下の円礫で埋めている。礫種は花崗岩や「石英斑岩」が多く、中・古生界由来の礫も含まれる。層厚は10数mに及ぶかと推定される。犬山付近で、木曾川泥流(約2.7万年前)におおわれ、かつ、熱田層より新しいので、約3万年前の地層である。(写真Ⅱ-4)。



写真Ⅱ-4 小牧礫層
(春日井市篠木町)

熱田層が礫層により構成される地域がある。春日井市篠木の北、守山台地、名古屋市東区矢田(長母寺の近く)である。守山台地では10 m前後の厚さがあり、数cm以下の垂円～円礫よりなる。西へ行くほど細粒となり、砂層をはさむ。

以上の層の他に、地下において、「石英斑岩」の大礫を含む木曾川系の円礫層からなる第一礫層が存在する。第一礫層は南陽層・濃尾層の下位に、熱田層を不整合におおって分布する。よく連続し、第一滯水層とも呼ばれる。厚さは埋没谷中では20 mをこすこともあり、一般に北東から南西へ傾いていて、-

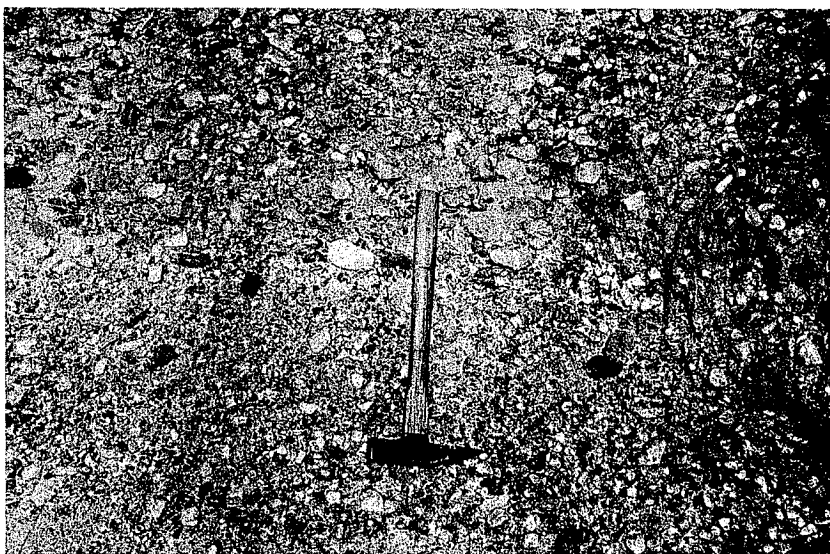
50 mの深さに達する。鳥居松礫層に連続する可能性がある。

2.2 半固結堆積物

2.2.1 礫を主とする層（g）

名古屋市北部の東山丘陵および竜泉寺丘陵に分布する八事層・唐山層と、篠岡丘陵に見られる高位段丘礫層と上末層がこの層である。

東山丘陵の2層のうち、八事層は上位にあり、ほとんどが「古生層」起源のチャートの円～亜円礫からなる（写真Ⅱ-5）。その他、「石英斑岩」、ホルンフェルスなども見られる。礫径は5 cm前後が普通で、時に10 cmをこす。南になる程礫径を減ずる。礫層の基質は花崗質砂である。しばしば赤色化したシルトや砂の薄層をはさむ。20～30 mの層厚をもち、西へ厚くなる傾向が見られる。八事層の堆積面を八事面と呼ぶ。



写真Ⅱ-5 八事層
（名古屋市千種区平和公園北）



写真Ⅱ-6 唐山層
(名古屋市千種区平和公園北)

唐山層(写真Ⅱ-6)は八事層の下位に不整合関係で分布し、'石英斑岩'の礫を主体とする。礫径は40cm以下で、その他、チャート、ホルンフェルス、砂岩、頁岩などの礫も含む。上部に赤色のシルト層をもつことがあり、両方で10~15mの厚さがある。チャート以外の礫はいちじらしい風化を受けており、色は赤褐色で、スコップで切れる程軟らかくなっていることがあり、'くさり礫'と呼ばれる。また、唐山層を'赤礫'、八事層のチャートを主とする礫層を'白礫'と呼び、その対照的な特徴を表現することもある(写真Ⅱ-7)。



写真Ⅱ-7 八事層(上部)と唐山層(下部)
(名古屋市千種区平和公園北)

篠岡丘陵の南縁の、桃山、桃花園付近に分布する高位段丘礫層は、段丘を構成し、その位置によって、大きく3つに区分され、異なる名称が与えられている。チャートの亜円礫を主とし、ホルンフェルス、砂岩、"石英斑岩"、花崗岩などの礫もまじえる。礫径は10cm以下のことが多いが、時に30~50cmに及ぶこともある。基質は砂である。層厚は各段丘により異なるが、最大20m、ふつう10m以下である。

唐山層によく似た岩質をもった礫層が篠岡丘陵の上末付近に点在し、上末層と呼ぶ。赤色に風化した"くさり礫"(花崗岩、"石英斑岩"、砂岩・頁岩など)が主体で、数cm大のチャート礫層を伴う。"くさり礫"の礫はふつう10cm大で、基底部で20~30cm、最大50cmに達することがある。層厚は10mである。

濃尾平野の地下で、熱田層より下位、矢田川累層より上位に存在する地層は、上より、第二礫層・海部累層・第三礫層・弥富累層である。

第二礫層は熱田層のすぐ下位に連続する地形で、濃尾平野東部・北部の地下に発達する。チャート・石英斑岩の大礫を含む。厚さは10～30mである。図幅西部では-100mを越す深さを持つ。

海部累層は第二礫層の下位にあり、海成粘土層・砂層・礫層である。東部・北部で薄く(30～40m)、南西部では100m近い。珪藻化石の産出により、海成・汽水成であることが確かめられている。

第三礫層はさらに下位に分布するが、層厚は10～20mで、図幅南西部で深度-250m付近にあり、北または東へ浅くなる。地盤沈下観測井の資料(Ⅱ-1図)によると、一宮市東部～春日村～岩倉市など、東北部の地域には分布しない。

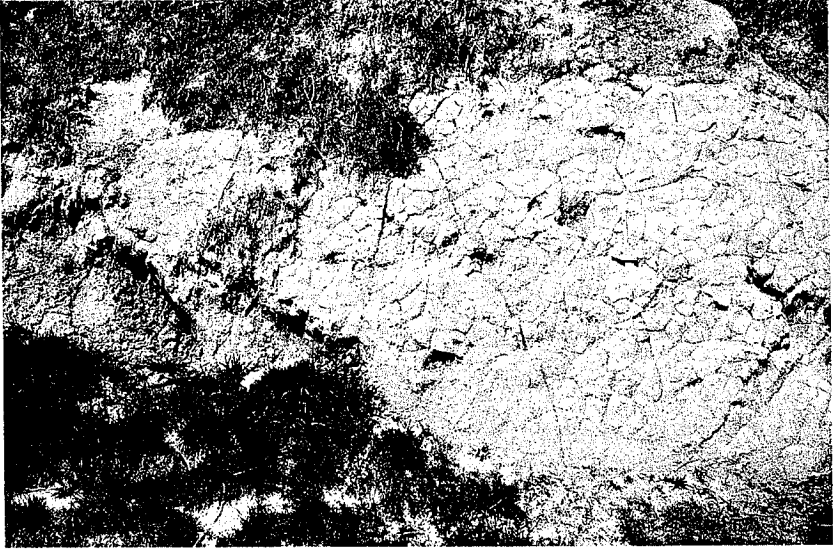
第三礫層の下位に弥富累層がある。非海成と推定される粘土層と砂または砂礫層との互層である。弥富累層の基底は津島市付近では-350m以深にあたり、北東に向って浅くなる。

以上の、第二礫層より下位の地下の地層は、かつて八事層相当層とされていたが、現在では、海部層が高位段丘礫層の一部、弥富層が八事・唐山層にそれぞれ相当するとされている。地下地質の概要を地盤沈下観測井の地質柱状図で示した(Ⅱ-1図)。

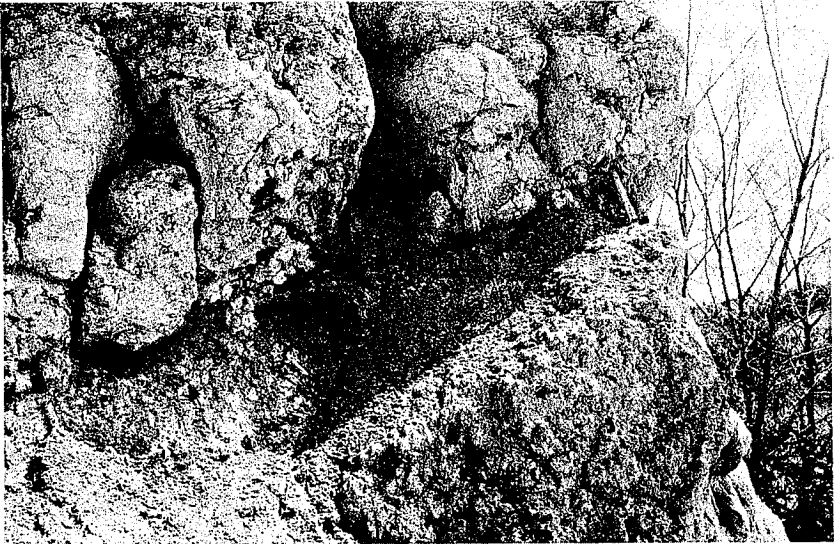
2.2.2 砂・泥の互層(Sm)

瀬戸層群矢田川累層のうち、上位の猪高層・尾張夾炭層(高針層)と呼ばれる部分为本図幅地内に分布する。主に、シルト・泥・砂の互層であり、砂礫・亜炭・火山灰を伴う(写真Ⅱ-8)。

本層の主体となるものは、塊状のシルトで、色は灰色であるが、風化すると茶褐色となる。その他、砂層・砂礫層と互層することがあり、亜炭層、火山灰層も挟む。火山灰層はよく連続し、鍵層となる。厚さは本図幅内で50mを越す。固結堆積物(中・古生層)の上に不整合で重なる(写真Ⅱ-9)。



写真Ⅱ-8 矢田川累層の粘土
(小牧市本庄尾関学園高校)



写真Ⅱ-9 中・古生層と矢田川累層との不整合関係
(小牧市本庄尾関学園高校の西)

2.2.3 砂・礫を主とする層(Sa)

篠岡丘陵に分布する矢田川累層の大部分は砂礫・礫を主とする層で、区別される。層厚は60m～80mで、チャートの数cm～10cm大の亜円礫を主とする下部、5cm以下のチャート礫を主とする砂礫層の中・上部に区分される。中部と上部の間に著しい火山灰層が挟まれる。

矢田川累層は全体として数度以下の緩傾斜で西へ傾き、濃尾平野地下で更新統の下位に分布する。

2.3 固結堆積物

2.3.1 チャート(ch)

チャートは主に本宮山山地をつくって広く分布する。小牧山もチャートで構成される。本地域から東北、岐阜県へかけて分布する中・古生層(「秩父古生層」)の一部である。層状チャートが主であるが、二畳-三畳紀のもの、ジュラ紀の異地性岩体のものがある。岩質的に区別することはむづかしい。褶曲し、色は多様である。硬く、風化すると細かいブロックに割れる。侵食されにくく、急地形をつくる(写真Ⅱ-10)。



写真Ⅱ-10 チャート(ジュラ紀の異地性岩体)
(小牧市本庄尾関学園高校)

2.3.2 粘板岩・砂岩(altsm)

粘板岩と砂岩の互層で、砂岩が優勢な部分と粘板岩が優勢な部分とがある。砂岩は硬く、風化するとブロック状にわれる。粘板岩はやや軟質で、風化して岩屑状にわれる(写真Ⅱ-11)。



写真Ⅱ-11 粘板岩(ジュラ紀)
(犬山市大県神社)

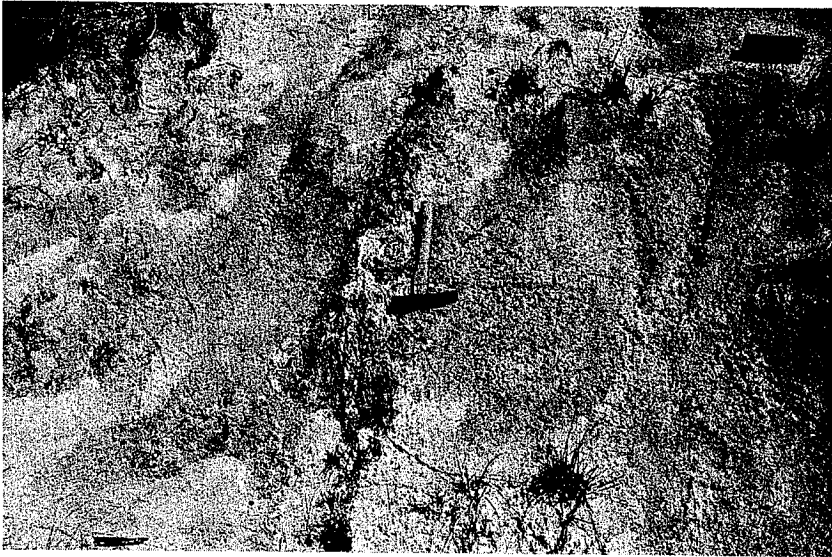
上記の2つの岩層はかつてすべて二畳紀と考えられていたが、化石の証拠により、現在では中生層も存在することがわかった。しかし、野外では区分しにくく、かつ、岩質も似ているので、ここでは岩質により2つにわけた。

いずれも50°以上の急傾斜をすることが多く、池野の南に、ほぼ東西の軸をもった背斜構造が見られる。いずれも花崗岩による接触変成作用を受けている。

2.4 深成岩

2.4.1 花崗岩質岩石 (Gr)

本宮山山地および岩崎山に、小さい露出が見られる。乳白色～白色の黒雲母花崗岩を主体にし、苗木・上松花崗岩に連続するものと推定される。風化していることが多い(写真Ⅱ-12)。



写真Ⅱ-12 黒雲母花崗岩(風化している)
(犬山市久保)

2.5 断層

3本の潜存断層が本図幅地域内に見られる。一宮線(一宮-稲沢線)

「名古屋北部」図幅の西部、木曾川町より一宮市をへて新川町まで、ほぼ東海道線に沿って、北北西-南南東に走る。濃尾地震前後の水準測量結果を比べると、この線の東側は最大0.7 m隆起し、西側は0.3 m沈下した。一宮市におけるボーリング結果の比較でも、熱田層の軽石層が西側で5 m深くなっているし、重力調査でもこの線に沿って異常が認められる。地下地質における食い違いが以前からあり、それと濃尾地震の際の地盤変動(この線を第2震裂破動線と

呼ぶ)と関連があると思われる。

大藪 — 津島線

「津島」図幅中の、中島郡祖父江町拾町野から平和町六輪へかけて、一宮線と平行して走る。北端は大垣市近くにまで及ぶ。この線を境にして、西側の第二礫層以深の地層の傾斜が急になるので、活断層の可能性が大きいといわれている。

大垣 — 今尾線

大垣市南方の今尾町から南南東へ延びる推定活断層をいうが、その南端が、「津島」中の立田村へ及ぶ。大藪 — 津島線と同様、この線の西側で第二礫層の傾斜が大きくなる。水質も東西で変化する。濃尾地震の際の第3震裂破動線には対応する。

3. 表層地質分類と開発および保全との関連

3.1 地下水

濃尾平野は被圧面地下水に恵まれた地域で、豊富な地下水を供給して来た。第2次世界大戦後、水の使用量が増加し、それに伴い、地下水位が低下した。昭和49年以降、揚水が規制され、かつ需用も減少したため、やや回復しつつある。

主要帯水層は第一礫層・第二礫層・第三礫層である。第三礫層については、井戸数が少なく、明らかでない。

第一礫層は「沖積層」と熱田層との間に挟まれて広く連続する。厚さ20m以上ある。その上面の深度は地質図上に示される。東北部では犬山扇状地礫層が鳥居松礫層に連なるとみられる。本地域の主要帯水層である。

第二礫層は熱田層の下位にあり、30m前後の厚さをもつ。東部では扇状地や段丘の礫層に移化し、西または南へ深くなる。

第三礫層は10～20m層厚で、やはり南・西へ深くなる。この他、弥富果層の基底部に10～20mの礫層がある。

本地域内で、揚水量10,000t/日の地域は、一宮・稲沢・春日井・名古屋

市周辺、尾西市から佐織町へかけての木曾川右岸地帯である。

濃尾平野全体の地下水利用は、昭和48～49年で日量380万トンで、工場用60%、建築物用9%、水道用13%、農業用18%の割合である。

水質について見ると、北または東部の平野部では炭酸カルシウム型であり、北東部の段丘地域、庄内川沿い、平野の中・南部には炭酸ナトリウム型の地下水が見られる。

3.2 地盤

本図幅地域の地盤は大きく3分される。すなわち、中・古生層の分布する山地および瀬戸層群の分布する丘陵地、唐山層以下大曾根層に及ぶ更新統の発達する台地、沖積平野である。各区分単位の、地盤としての特性をまとめると、次のようになる。

(1) 山地～丘陵地に分布する地層・岩石は固結して良好な地盤である。わずかに分布する風化花崗岩、中・古生層上に時に発達する崖錐性堆積層(表層地質図上には表現されていない)には配慮が必要である。

(2) 台地では礫層・砂層がよく発達し、締っていて、良い地盤といえる。

(3) 平野部の沖積層は山地～丘陵、台地に近接する部分では沖積層は薄く、遠ざかるにつれて厚さを増す。一般に、沖積層はよい支持層とならず、特に粘土層には多くの問題がある。沖積層の厚さが増加することは、支持層が深くなることを意味している。図上に示したように、「沖積層」——後氷期の海面上昇期の堆積物——の基底は、「名古屋北部」南西部から「津島」南部(木曾川右岸)では-30～-45mにも及ぶ。また、顕著ではないが、いくつかの埋没谷地形も見られる。このような地域の地盤については多くの調査・研究がなされ、まとめられているので参考にして、さらに必要ならば調査しなければならない。

(4) 庄内川上流部(勝川橋以東)矢田川流域では、沖積層は5m以下であり、主に砂、礫よりなるが、局地的な変化もあるので、注意が必要である。段丘(台地)上の川や谷を埋める沖積層についても同様である。各地の既存資料(ポ

ーリング)を柱状断面図に示した。

3.3 災 害

いわゆる0 m地帯は、「名古屋北部」の南西部、「津島」の地域内南部に存在する。伊勢湾台風の時に、長期間湛水区域となり、また、軟弱地盤であって、地盤沈下、震害などの災害を受けやすい地域である。災害常習地帯であると同時に災害激甚地帯であり、常に警戒の必要な地域である。

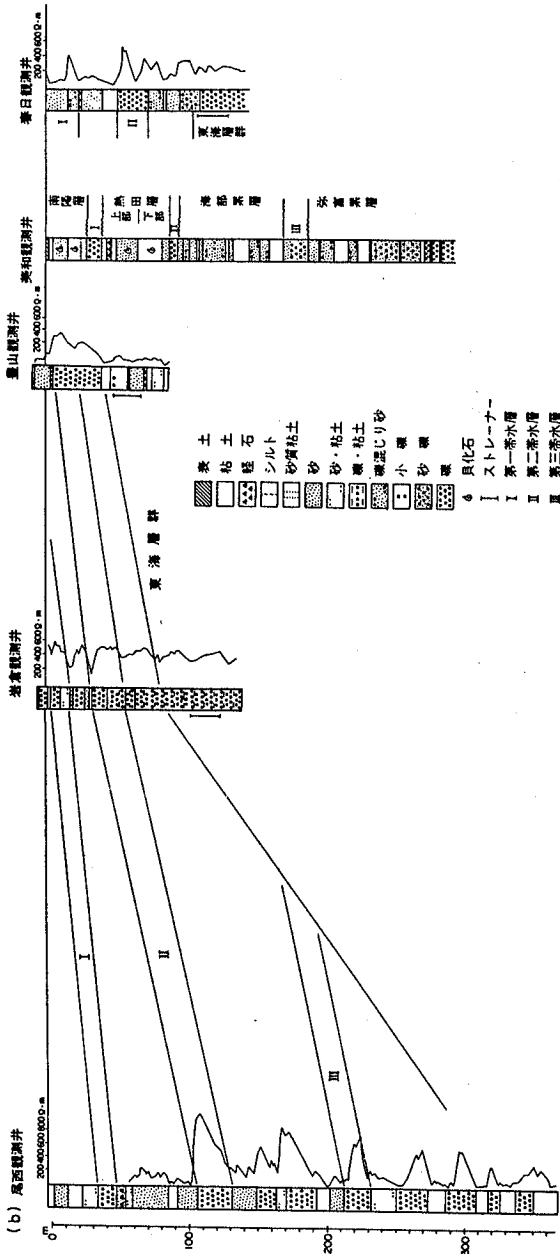
一般的なことについては、多くの調査結果とそれに基づくまとめが行われているし、「名古屋南部」図幅の説明中でもふれたので、本地域に関連することのみ、簡単に述べておく。

3.3.1 地盤沈下

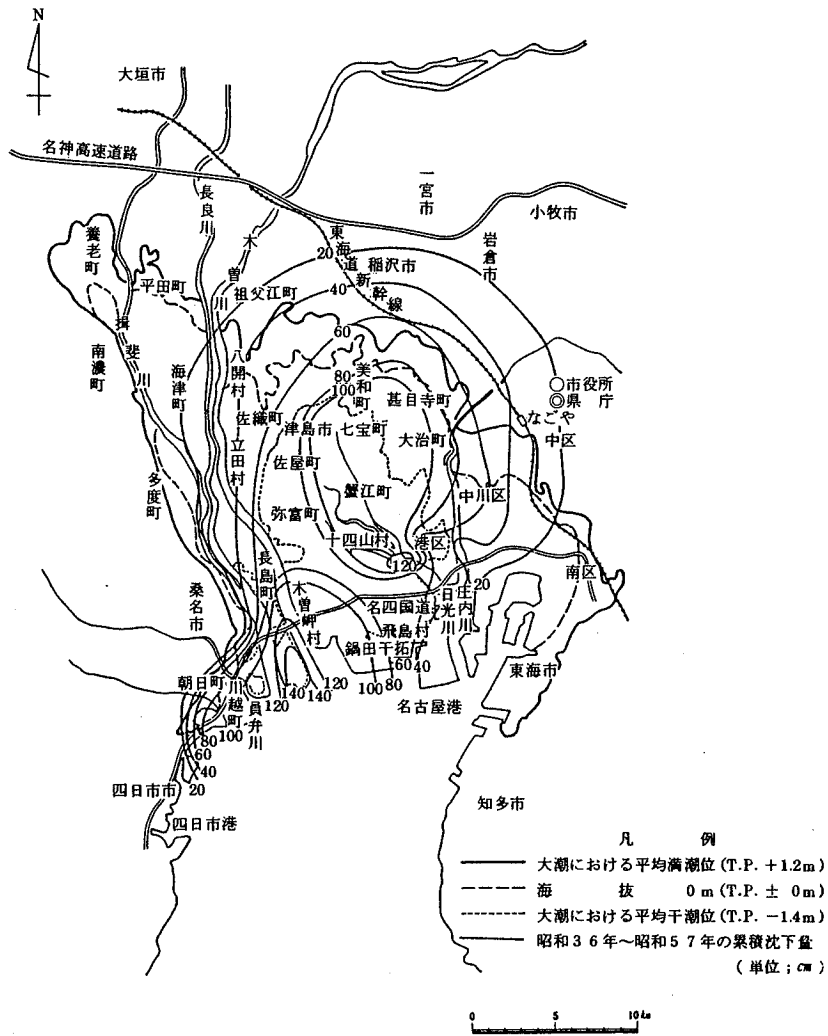
濃尾平野南部における地盤沈下については、最近多くの調査研究がある。今までの沈下傾向を見ると、昭和35年(1960)頃までは、東南海地震による急激な沈下を除いて、年平均1~2 cmの沈下が見られたに過ぎない。その後沈下量は急に増大し、昭和48年(1973)にピークに達し、年間で最大23.5 cmに達する所さえ生じた。これは主に地下水汲上げの増加によるもので、その後、規制が行われ、不況も相まって揚水量が減り、それに伴って沈下速度は小さくなった。しかし、現在でも進行しており、調査・観測が引き続き行われている(Ⅱ-1図)。

図幅地域内では南部に見られ(Ⅱ-2図)、大治町・七宝町・津島市の地域で大きく、その周辺の、甚目寺町・美和町・佐織町・平和町・八開村・立田村などがそれに続く。稲沢市・平和町の観測井では地下水位の回復に伴って、沈下量が減少している(Ⅱ-3図)。

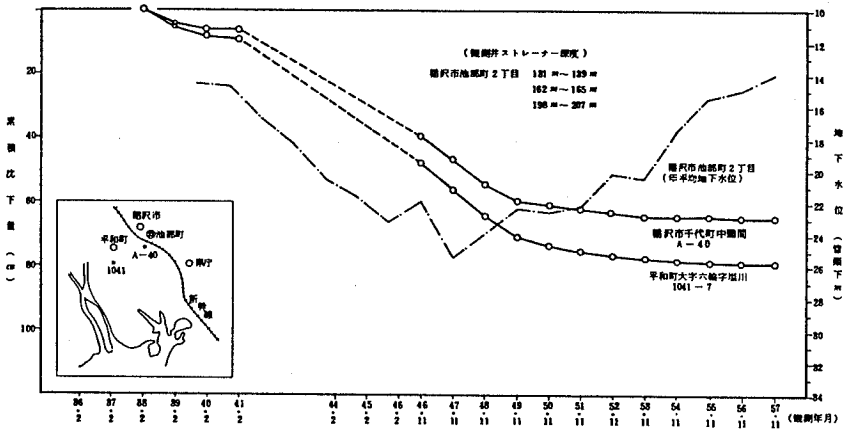
地下水汲上げ規制と関係があり、また、各種の災害と関連する事項なので、問題が多く、かつ複雑である。詳細は文献に示される調査結果に示されている。



II-1 図 地盤沈下観測井地質柱状図
 (5万分1地質図「名古屋北部説明書」1984)



II-2図 濃尾平野の昭和36～昭和57年の
累積沈下量と海面以下の地域
(東海三県地盤沈下調査会, 1983)



Ⅱ-3 図 水準点・地下水位変動図
(稲沢市・平和町)

3.3.2 震 害

本地域に被害をもたらした地震として、東南海地震（遠州灘 — 駿河湾に震源がある）と濃尾地震（内陸に震源がある）があげられる。日本の地震分布から見て、この2つのタイプの地震が今後も起り、本地域に影響を与える可能性があるので、これらについて述べる。

東南海地震は沖積層の軟弱地盤の地域に大きい被害をもたらした。濃尾平野でいえば、伊勢湾沿いの地域で、家屋の倒壊率が31.2%に達した飛鳥村や19.8%の弥富町鍋田などがそれに当る。本地域内では中島郡明治村（現在は稲沢市）が1.13%であった。

名古屋市南部について見ると、震害は表層の土質と密接に関連しており、表層5mまでの軟弱層（N値が4以下の砂層と2以下の粘土層）の厚さの割合が震害とよい相関を示すといわれる。このことは、本地域内にも適用できそうである。

濃尾地震の場合、すでに述べたように、2つの震裂破動線と呼ばれるものが

本地域内を走っている。すなわち、一宮線（第二）、大垣 — 今尾線（第三）である。一宮線より東は隆起、一宮線と大垣 — 今尾線の間は沈下、さらに西では沈下が小さい。

愛知県下の倒壊率はⅡ-2表に示されるが、木曾川に沿った中島郡、葉栗郡が50-75%の倒壊率で最大であり、これに接する地域、たとえば、西春日井郡、丹羽郡などがこれに続く。

Ⅱ-2表 愛知県下市郡別住家倒壊率

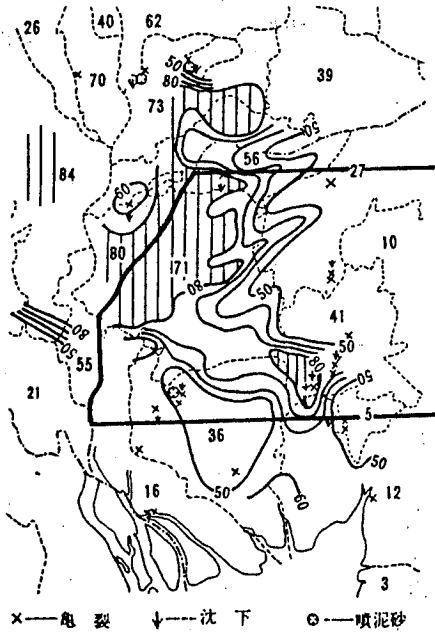
市 郡	倒壊率 (%)	市 郡	倒壊率 (%)	市 郡	倒壊率 (%)
名古屋市	5.0	丹羽郡	26.1	海西郡	16.1
愛知郡	12.4	葉栗郡	56.4	知多郡	0.3
東春日井郡	9.9	中島郡	75.8	碧海郡	1.3
西春日井郡	41.1	海東郡	36.1	西加茂郡	0.2

これらの資料を総合して分布図（Ⅱ-4図）をえがくと、激震地帯はほぼ第二—第三震裂破動線にはさまれた地帯で、北へゆくほど激しくなっている。本地域西部の大部分は当然のことであるが、被害激甚地帯に相当する。

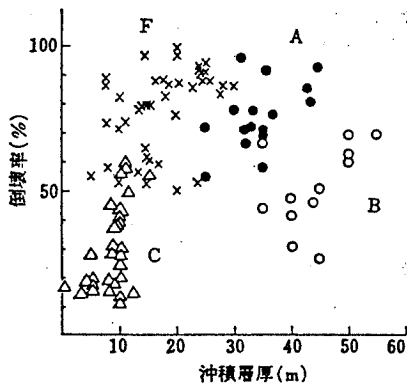
濃尾地震の場合は震害と地盤との間には、東南海地震のようなはっきりした対応は見られない。むしろ、地塊運動と関係が深いといえそうである（Ⅱ-5、6図）。すなわち、倒壊率が高めになったのは地震断層（第2震裂破動線）付近（Ⅱ-6図のF）とその東側の地域（C）であり、西側の地域（A、B）では逆に被害が沖積層厚に比して低めに表われている。

濃尾地震による地変は各所に見られ、地割れ、隆起、陥没などが起り、噴砂・噴泥も多かった。

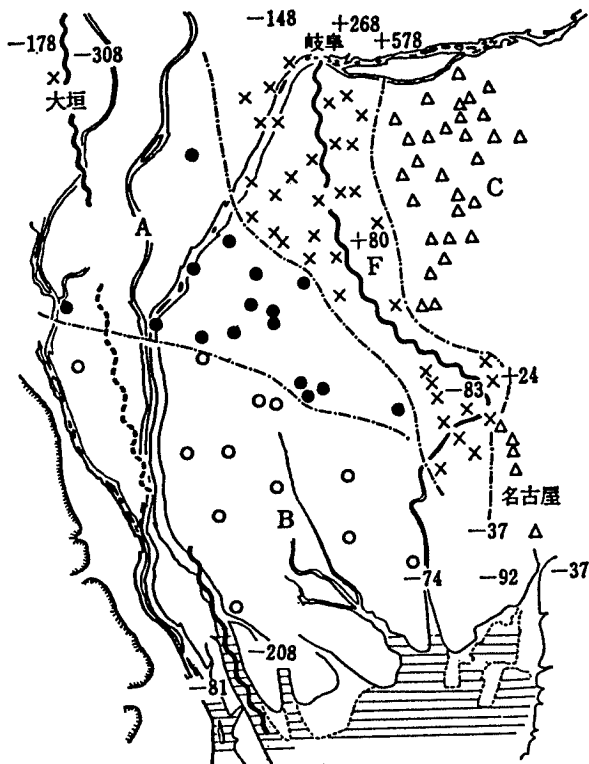
以上から、本図幅地域内、とくに、軟弱地盤の地域、潜在断層の存在する地域は震害に対する対策が必要である。多くの資料があるので参考にすることができる。



II-4 図 濃尾地震における村別住家倒壊率(%)分布図
 数字は倒壊率(%)を示す。ゴシック数字は点線で
 区画された地域内の倒壊率を示す。
 枠内は図幅の範囲(名古屋地盤図, 1969)



II-5 図 濃尾平野における沖積層の厚さと被害率との関係
 記号は第6図と対応する(名古屋地盤図, 1969)

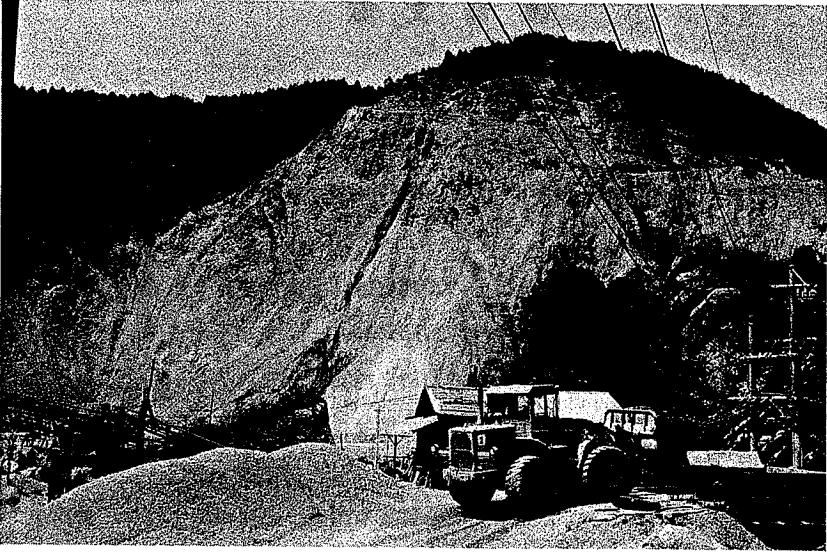


II-6 図 濃尾地震被害と地盤の相関がことなる地域分布
 数字は地震前後の地盤変動量(mm)
 記号は第5図と対応する(名古屋地盤図, 1969)

3.3.3 その他

本地域内には稼行している鉱山はない。砕石場として、犬山市楽田地区において3ヶ所、砂岩を骨材として採取している。年産量は昭和55年で、およそ1,520,000トンである。主に道路用である(写真Ⅱ-13)。

温泉として、祖父江温泉(2号線)がある。泉温33.4℃、湧出量105ℓ/分(動力)、pH7.7、ナトリウム・カルシウム-塩化物温泉である。その他3井があるが利用されていない。



写真Ⅱ-13 採石場（犬山市入鹿池西）

参 考 文 献

- 愛知県地盤沈下研究会(1975~1980):地盤沈下の実態とその対策に関する調査研究報告書. 1~6. 愛知県環境部.
- 愛知県防災会議地震部会(編)(1983):愛知県の地質・地盤. 資料編 その1〔尾張部〕.
- 地質調査所(1981):20万分の1地質図「名古屋」第2版.
- 深田淳夫・糸魚川淳二(1962):20万分の1 愛知県地質図. 愛知県古川博恭(1972):濃尾平野の沖積層. 地質学論集, 7号.
- 糸魚川淳二(1974):20万分の1土地分類図 — 愛知県 — (表層地質図). 経済企画庁.
- (1983):愛知県土地分類基本調査5万分の1「岐阜・美濃加茂・瀬戸」(表層地質). 愛知県.
- (1985):同上 「桑名・名古屋南部」(表層地質). 愛知県. 調査5万分の1「豊田」(表層地質). 経済企画庁.
- 桑原 徹(1968):濃尾盆地と傾動地塊運動. 第四紀研究, 7巻4号.
- (1971):瀬戸層群の堆積相. 竹原平一教授記念論文集.
- ・板橋一雄・植下 協(1976):濃尾平野の地盤沈下とその解析. 土と基礎, 24巻12号.
- ・植下 協・板橋一雄(1977):濃尾平野の地盤沈下. 土と基礎, 25巻6号.
- (1980):伊勢湾周辺の中部更新統. — その分布と断層地塊運動 — . 第四紀研究, 19巻3号.
- 松沢 勲(1962):名古屋市地質図.
- ・嘉藤良次郎(1954):名古屋市付近の地質, 同地質図. 愛知県.
- 森 忍(1971):名古屋市東部の瀬戸層群, 矢田川累層. 地質学雑誌, 77巻.
- 森山昭雄(1977):木曾川平野表層堆積物の粒度組成. 地理学評論, 50

卷.

村下敏夫・武居由之(1961):木曾川左岸

————(1979):愛知県の地質・地盤(その2) 表層地質(付20
万分の1表層地質図)。愛知県防災会議。

井関弘太郎(1980):愛知県の地質・地盤(その3) 沖積層の分布と液
化状現象。愛知県防災会議。

春日井団研グループ(1971):春日井市付近の地形面、竹原平一教授記念
論文集。

嘉藤良次郎・桑原 徹(1967):名古屋市付近の新第三系・第四系。日本
地質学会地質見学案内書。(1967,名古屋)3。

建設省計画局、愛知県・一宮市(1965):愛知県一宮地区の地盤。都市地
盤調査報告書 第11巻。

————・————・三重県(1962):伊勢湾北部臨海地帯の地盤。
同上,第1巻。

小牧団研グループ(1971):小牧市付近の矢田川累層。竹原平一教授記念
論文集。

近藤直門・足立 守(1975):犬山市北方の中生層——とくに坂祝礫岩に
ついて。地質学雑誌,81巻6号。

近藤善教・高田康秀(1972):土地分類基本矢作川および豊川流域水理地
質図及び説明書。地質調査所。

岡田篤正(1979):愛知県の地質・地盤(その4) 活断層。愛知県防災
会議。

名古屋大学小穴研究室(1961):濃尾平野の地下水。愛知県工場誘致委員
会。

名古屋大学地盤変動研究グループ(1967):伊勢湾北部地域地盤沈下調査
研究報告書。

名古屋市防災会議(編)(1973):名古屋市地震対策基礎資料図。

日本建築学会東海支部ほか(編):名古屋地盤図。コロナ社。

濃尾平野第四系研究グループ(1977)：濃尾平野第四系の層序と微化石分析。地質学論集, 14号。

坂本 亨 ほか(1984)：名古屋北部地域の地質。地域地質研究報告(5万分の1図幅)。地質調査所。

高田康秀・近藤善教・宮村 学(1979)：津島地域の地質。同上。地質調査所。

東海農政局(1980)：濃尾地区地盤沈下基礎調査報告書。

東海三県地盤沈下調査会(1983)：昭和57年度における濃尾平野の地盤沈下の状況。

Ⅲ 土 壤

1 土壤概説

1.1 山地、丘陵地地域の土壤（林地土壤）

本年度の対象図幅は、「津島」「名古屋北部」の2図であるが、このうち林地土壤が存するのは、「名古屋北部」の1図幅である。このうち山地は本図幅の北東端に偏在し、標高は本宮山の292.8mを最高にほぼ南東に走向し、その延長線上に小牧山、岩崎山等の低山が存する。

丘陵地は、本図幅の東部、中央自動車道沿線や庄内川上流左岸、矢田川左岸に団地状に分布し、標高は概ね100m以下のものが多い。

地質は、北東端の山地の部分は秩父古生層及び新第三紀の瑞浪層群で、東部の丘陵地の大部分は、新第三紀瀬戸層群よりなっている。

この地域の植生は、常緑広葉樹林で特徴づけられる暖帯に属し、天然アカマツと常緑広葉樹やコナラを始めとする落葉広葉樹との混交林が多く、人工林は山地の北面斜面下腹及び南面斜面でも沢の深い林地にみられ主にヒノキが植栽されている。

土壤は、すべて褐色森林土で、これは更に地質、母材、堆積様式、断面形態、分布地域等により、次の3土壤統群、8土壤統に区分した。

土 壤 群	土 壤 統 群	土 壤 統
褐色森林土	乾性褐色森林土壤 (黄褐系)	{ 入 鹿 池 統 二 ノ 宮 統
	乾性褐色森林土壤 (未熟土系)	{ 矢 田 川 統 相 野 山 統
	乾性褐色森林土壤	{ 定 光 寺 ノ 統 岩 崎 山 統 小 牧 山 統 平 和 統

乾性褐色森林土壌（黄褐色系）は、入鹿池統・二ノ宮統の2統である。入鹿池統は、チャートを母材とする残積土、匍行土で土性は砂質壤土、大部分は林野庁分類によるBB型土壌であるが、尾根の二部にはEr土壌も出現している。下層は通気、透水も悪いので林木の成長はよくない。沢筋にはヒノキの人工林もみられる。

二ノ宮統は、砂岩、泥岩等を母材とする残積土、匍行土でBB型土壌が主でアカマツと広葉樹の混交林が多く生産力は低い。

乾性褐色森林土壌（未熟土系）は、矢田川統、相野山統の2統である。

この土壌統は、瀬戸・美濃加茂・岐阜、豊田、名古屋北部の図幅の第三系地帯丘陵地に分布し、10YRの色相を有する土壌である。

母材の違いにより2分したが、土性は砂質壤土～埴質壤土である。

BB・BC型土壌が大部分で生産力は極めて低い。

乾性褐色森林土壌は、定光寺1統、岩崎山統、小牧山統、平和統の4統である。

前3統は古成層に属し、林野庁分類によるBB～BC型がほとんど占め、土性は砂質壤土～埴質壤土である。

平和統は、新第3紀に属し、土性は埴質壤土である。

いずれも、7.5YRの色相を有する土壌統である。

1.2 台地及び低地域の土壌（農地土壌）

本図幅の農地土壌は、図幅の中部から西部の沖積平坦地にかけて分布する灰色低地土、グライ土、褐色低地土等の低地土壌と、東部の洪積台地から第三紀丘陵地にかけて分布する赤黄色土、黒ボク土、褐色森林土等の台地土壌に区分される。

低地土壌のうちグライ土は木曾川に近い南西部低湿地帯に分布して水田地帯を形成し、褐色低地土は一宮市を中心とした北部に多く、都市近郊の野菜畑地帯を形成している。灰色低地土は中部を主体に分布し、水田と野菜畑が混在している。

一方、台地土壌の赤黄色土、黒ボク土は、小牧市、春日井市を中心として分布し、水田や野菜畑として利用されているが、近年都市化の傾向が著しく、宅地等非農地への転換が多い。丘陵地に分布する褐色森林土にはモモ等の樹園地が多い。

本図幅内に分布する農地土壌は、土壌群として8群、土壌統群として14群に区分され、更に土壌統として40統に細分された。次に、各土壌群の特徴を概説すれば次のとおりである。

黒ボク土：腐植層を有する洪積土壌で、酸化沈積物の有無によって黒ボク土壌と多湿黒ボク土壌に区分される。酸化沈積物のない黒ボク土壌は畑地帯に分布し、酸化沈積物のある多湿黒ボク土壌は水田地帯に分布する。腐植層の厚さはおおむね表層から40cm内外であるが、全層が腐植層からなるものもある。前者は下層が黄褐色を呈する粘質土壌で礫含量の多いものもある。

本土壌群は酸化沈積物の有無、腐植層の厚さによって2土壌統群、4土壌統に区分した。

褐色森林土：土色が黄褐色を呈する崩積土壌で丘陵傾斜地に分布する。土性が壤質と粘質のものがある。排水よく酸化沈積物の斑紋は認められない。

土性により1土壌統群、2土壌統に区分した。

赤黄色土：堆積様式が洪積と第三紀鮮新世の残積、土色が赤色（又は赤褐色）と黄色（又は黄褐色）のものがある。土性は粘質ないし強粘質で、このため作土下の土壌がち密で作物根の伸長を阻害している。洪積土壌には50cm内外の深さから礫層の出現するものもあり礫含量が概して多い。

本土壌群は土色、堆積様式、礫層と酸化沈積物の有無等により、2土壌統群9土壌統に区分した。

灰色台地土：洪積台地上に分布する灰褐色の強粘質土壌である。赤黄色土とは土色の点で区分される。

1土壌統のみを設定した。

褐色低地土：堆積様式は水積（沖積）であるが、地下水位低く排水がよいため土色は黄褐色を呈する。1部に礫層のあるもの、酸化沈積物の認められるも

のもあるが、上層から下層に至るまで均質な土壌断面を有するものが多い。

礫層と酸化沈積物の有無、土性により1土壌統群、5土壌統を設定した。

灰色低地土：本図幅で最も分布範囲の広い沖積平坦地の土壌で、土色は主として灰色であるが、一部排水のよいところに灰褐色を呈するものもある。いずれも80cm以内の深さにグライ層は出現しない。水田地帯に分布するものは酸化沈積物斑紋の生成が多い。土性は壤質が主体であるが、砂質から強粘質にわたっている。

土性、土色、礫層と酸化沈積物の有無により、3土壌統群、10土壌統に区分した。

グライ土：地下水位の高い沖積低湿地に分布し、おおむね60cm以上の深さからグライ層が出現する土壌で、排水不良のため畑利用の困難な土壌である。中でも作土直下からグライ層となっている土壌では、土壌の酸化還元電位の低下に原因する根ぐされが水稻の生育を阻害している。土性は強粘質から砂質に至るまで種々あり、砂質のものは河川の近くに多い。また、一部に礫層の出現するものもある。

本土壌群は、土性、礫層の有無、グライ層の出現位置、酸化沈積物の状態により3土壌統群、8土壌統に区分した。

泥炭土：本図幅に分布する泥炭土は、黒泥土壌統群の1統のみで、30～50cm以下が黒泥層よりなる土壌である。土性は粘質ないし強粘質で、酸化沈積物の斑紋が認められる。

2 土壌細説

2.1 山地・丘陵地地域の土壌（林地土壌）

2.1.1 乾性褐色森林土壌（黄褐色）

この土壌統は、山地の乾燥し易い地域に分布し、10YRの色相を有する土壌である。

主に 母材の違いにより次の2つの土壌統に区分した。

入 鹿 池 統	チャート
二 ノ 宮 統	砂岩・泥岩

1) 入鹿池統(その1)

本土壌統は、瀬戸凶幅から続き、本凶幅の北東端の県道明治村小牧線(453号線)の両側に主として分布する10YRの色相を有する乾性褐色森林土壌(黄褐色)である。

鈍頂尾根や山麓には、7.5YRの色相を有するのみみられる。

母材は、チャート、A層は10cm内外で土層は深い。林相は天然生のアカマツと広葉樹の混交林であるが、沢筋には一部ヒノキの人工林もみられる。

代表断面 (地点番号 ①)

位 置 小牧市大字野口字神尾前

海 抜 高 130m 傾斜 15° 方向 N34°E

地質・地形 二疊紀～ジュラ紀 中・古生層
白山の北側で北東にのびる小尾根の下腹

母材・堆積様式 チャート、残積土

林 況 上層には、天然アカマツ約7令級(樹高約10m)が
中層には、ソヨゴ、タカノツメ、リュウブ(樹高約7m)が
下層には、ヒサカキがみられる。

断面状態 L: 3cm アカマツの落葉
F: 2cm
H: —

層位	厚さ cm	層界	土性	礫	土色	腐植	構造	粗密度	粘り	水湿	根		備考
											草本	木本	
A	10 ～ 15	漸 変	砂壤土	小角礫あり	暗 褐 (10YR $\frac{3}{4}$)	含 粒・堅 果	密	強	乾	小根あり	小根富む		
B ₁	25 ～ 30		〃	中角礫あり	黄 褐 (10YR $\frac{5}{6}$)	乏 堅 果	〃	〃	半乾	なし	小根含む 大根あり		
B ₂	60+		〃	〃	黄褐～明黄褐 (10YR $\frac{5-6}{6}$)	〃	〃	〃	〃	〃	小根あり		

入鹿池統(その2)

白山(223m)の南側斜面に出現し、B₂層が7.5YRの色相を有するもので、林相は、天然アカマツと広葉樹の混交林で、生産力は、特に低い。

代表断面 (地点番号 ②)

位置 小牧市 大字野口字神尾前

海拔高 130m 傾斜 22° 方向 S60°E

地質・地形 二畳～三畳紀

白山(235.5m)の中腹南東斜面

母材・堆積様式 チャート 匍行土

林況 上層には、天然アカマツ約5令級(樹高約5m胸高直径10cm)、ヒサカキ、ネズミサツ、ネジキ、ソヨゴ(樹高3~4m)が混生し、地床には、コソダが繁茂している。

断面状態 L: 2cm アカマツの落葉樹

F: 5cm

H: —

層位	厚さ cm	層界	土性	礫	土色	腐植	構造	粗密度	粘り	水湿	根		備考
											草本	木本	
A	12	明瞭	砂壤土	なし	にぶい黄褐 (10YR 5/3)	乏 し	粉 (粉)	密	中	乾	なし	小根あり 中根あり	
B ₁	38 ~ 45		〃	小角礫 あり	明黄褐 (10YR 6/6)	〃	粒	〃	弱	〃	〃	小根含む 大根あり	
B ₂	43 ~ 50+	判然	〃	〃	橙~黄橙 (7.5YR 6~7/8)	〃	なし	〃	中	〃	〃	小根あり	

2) ニノ宮統

本図幅の北東端、大泉神社裏の砂岩・泥岩を母材とする区域および蓮池周辺の同岩を母材とする区域に出現し、10 YRの色相を有する乾性褐色森林土壌である。

A層は、10 cm以下が多く、小根に富んでいる。沢筋には、7.5 YRの色相を有するものも一部出現する。

林相は、天然アカマツと広葉樹の混交林で生産力は低いが、沢筋の一部にはヒノキの人工林もみられる。

代表断面 (地点番号 ③)

位 置 犬山市子宮山町

海 抜 高 140 m 傾 斜 35° 方 向 S 30°W

地 質・地 形 ジュラ紀 本宮山(海拔高292.8 m)から南にのびる尾根から西に派生する小尾根の南斜面上部

母材・堆積様式 砂岩・泥岩・塊状砂岩、残積土

林 況 上層には、約6令級の天然アカマツ(樹高約7 m、胸高直径約10 cm)、中層には、ネズミサシ、ヒサカキ、ネジキ等が下層には、ヤマウルシ、モチツツジ、ヤマハギ、コンダ等がみられる。

断 面 状 態 L: 5 cm アカマツ、ヒサカキ等の落葉

F: 5~6 cm

H: 2~3 cm 小根富む

層位	厚さ cm	層界	土性	礫	土色	腐植	構造	粗密度	粘り	水湿	根		備考
											草本	木本	
A	10	判然	砂壤土	小角礫含む 中角礫あり	にぶい黄褐 (10YR5/3-4)	乏し	粉・粒	密	弱	乾	小根含む	小根 富む	
B	90+		◇	大角礫含む	黄褐~明黄褐 (10YR5-6/6)	◇	粒	密	中	◇	なし	小根 含む	

2.1.2 乾性褐色森林土壌（未熟土系）

この土壌統は、瀬戸内幅からつづく丘陵地に分布し、10 YRの色相を有する土壌である。

主として母材の違いにより、次の2つの土壌統に区分した。

矢 田 川 統	礫及び砂・シルト
相 野 山 統	砂・礫

1) 矢田川統

本土壤統は、瀬戸凶幅に続き、本凶幅東北部の矢田川累層丘陵部に出現する 10 YR の色相を呈する乾性褐色森林土壤（未熟土系）である。

一般に土壤は乾燥し、腐植は厚く堆積し、分解は悪い。周辺は開発が進み森林は団地状に残されているにすぎないが貴重な都市林として大切に保存される必要がある。

代表断面 （地点番号 ④）

位 置 小牧市城山

海 抜 高 80 m 傾斜 15° 方向 N15°W

地質・地形 新第三紀 矢田川累層 東から西へのびる尾根状台地の北緩斜面上部

母材・堆積様式 礫及び砂・シルト、残積土

林 況 上層：アカマツ、アオハダ、コナラ、ソヨゴ（樹高 6 m）

中・下層：リュウブ、ヒサカキ、ネズミサシ、サルトリイバラ、モチツツジ、ウルシ

断面状態 L： 1 cm アカマツ、コナラ、ソヨゴ、落葉枝

F： 4 cm

H： 3 cm

層位	厚さ cm	層界	土性	礫	土色	腐植	構造	粗密度	粘り	水湿	根		備考
											草本	木本	
A	5 ~ 15	漸	砂質壤土	なし	褐 (7.5YR 4/4)	含む	粒・塊	中	弱	乾		中・小根 すこぶる 富む	
B ₁	10 ~ 20	変 漸	〃	小円礫 あり	黄褐 (10YR 5/6)	乏 し	塊	密	〃	〃		〃	
B ₂	27	変 漸	〃	なし	〃 (10YR 5/6)	〃	なし	〃	〃	半 乾	—	中・小根 あり	
C	48+	変	〃	〃	〃 (10YR 5/6~8)	〃	〃	〃	〃	〃	—	なし	

2) 相野山統

本土壤統は、瀬戸図幅に続くもので、本図幅の東中央部に分布する半固結の砂・礫を母材とする土壤統で、10YRの色相を呈する乾性褐色森林土壤（未熟土系）である。

一般に土壤は、乾燥し、小円礫が固くつまり、屋根部の生育は、極端に不良となる。市街地に相接する林地であるので、林業生産には適していないが、保全上極めて重要な森林である。

代表断面 (地点番号 ⑤)

位 置 名古屋市守山区大字吉根

海 拔 高 80 m 傾 斜 20° 方 向 N10°W

地 質・地 形 新第三紀 矢田川累層 北東から南西に走る細い
尾根の西北斜面中腹

母材・堆積様式 砂・礫

林 況 上層：アカマツ（樹高8m） ソヨゴ（樹高6m）

中・下層：ヒサカキ、コナラ、ネジキ、アラカン、ジャシャンボ

断 面 状 態 L： 2cm アカマツ、ソヨゴ、落葉枝

F： 1.5cm

H： 0.5cm

層位	厚さ cm	層界	土性	礫	土色	腐植	構造	粗密度	粘り	水湿	根		備考	
											草本	木本		
A	13	判然変漸	砂質壤土	小円礫 富む	にぶい黄褐 (10YR $4\frac{3}{3}$)	含む	塊・粒	中	弱	乾		中小根 富む		
B ₁	15		〃	〃	黄褐 (10YR $5\frac{5}{6}$)	乏し	なし	〃	〃	半乾		中小根 あり		
B ₂	17		〃	大角礫 あり	褐～黄褐 (10YR $4\sim 5\frac{5}{6}$)	〃	〃	密	〃	〃			〃	
C	55+		〃	〃	褐～明褐 (7.5YR $4\sim 5\frac{5}{6}$)	〃	〃	〃	〃	〃			なし	

2.1.3 乾性褐色森林土壌

この土壌統は、岐阜図幅からつづく本図幅北東端の山地の一部、市街地内の独立低山、そして名古屋南部図幅からつづき本図幅南東端の丘陵地帯に分布する7.5 YRの色相を有する土壌である。

主として、母材の違いにより、次の4つの土壌統に区分した。

定光寺ノ統	砂岩・泥岩・チャート
岩崎山統	雲母花崗岩
小牧山統	チャート
平和統	シルト・砂・粘土

1) 定光寺ノ統

本土壤統は、岐阜・瀬戸・美濃加茂図幅に出現し、本図幅東北部に分かれて分布している7.5 YRの色相を有する乾燥褐色森林土壌である。

地質はジュラ紀で、母材は砂岩・泥岩・チャートである。地形は急峻であるが、土壌は角礫に富み、固く生産力は小さい。

中腹以下は、ミカン畑に利用されているが、上部は森林以外の活用は無理である。

代表断面 (地点番号 ⑥)

位置 犬山市 字高根洞
 海拔高 90 m 傾斜 25° 方向 S25°W
 地質・地形 ジュラ紀 東から西へのびる尾根の南側平行斜面中部

母材・堆積様式 砂岩、泥岩、チャート

林況 上層：アカマツ、30～50年 13～15 m
 中・下層：リョウブ、クサギ、イヌツゲ、コナラ、ヒサカキ

断面状態 L: 4.0 cm アカマツ、リョウブの落葉樹
 F: 1.0 cm
 H: 0.5 cm

層位	厚さ cm	層界	土性	礫	土色	腐植	構造	粗密度	粘り	水湿	根		備考
											草本	木本	
A	20	判然変	埴質壤土	中角礫 富む	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	乏し	粒	中	中	半乾		小根 富む	
B	30		〃	〃	明褐 (7.5YR 5 ₆₋₈)	〃	堅果	密	中	〃		小根 含む	
C	50+		〃	中角礫 あり	〃 (7.5YR 5 ₆)	〃	なし	〃	中	〃		なし	

2) 岩崎山統

本土壤統は、本図幅北東部の山地に近接する独立山である岩崎山に分布する7.5 YRの色相を有する乾性褐色森林土である。

コナラ、アカマツ等の天然林が場所によって13 mに生育しており、現状のままの緑地として保存されることがのぞましい。

代表断面 (地点番号 ⑦)

位 置 小牧市 大字岩崎

海 抜 高 55 m 傾斜 10° 方向 N30°W

地質・地形 白亜紀 頂上から北西側の緩傾面でやや凸部

母材・堆積様式 雲母花崗岩、残積土

林 況 上層：コナラ、アカマツ、ソヨゴ、アラカシ、50年(樹高10 m)

中・下層：ヤマハゼ、カクレミノ、ヒサカキ

断面状態 L：3.0 cm ソヨゴ、ヤマハゼ、ヤクレミノ等 落葉枝

F：0.5 cm

H：1.0 cm

層位	厚さ cm	層界	土性	礫	土色	腐植	構造	粗密度	粘り	水湿	根		備考
											草本	木本	
B ₁	10	判然	砂質壤土	中角礫あり	明 褐 (7.5YR ⁵ / ₆)	乏 し	粒・堅果	密	弱	乾		細根 富む	
B ₂	22		〃	〃	橙～黄橙 (7.5YR ⁶ ～ ⁷ / ₈)	〃 し	なし	〃	〃	〃		〃	
基岩													

3) 小牧山統

本土壤統は、本図幅の市街地標高85.9mの小牧山に出現し、7.5YRの色相を有する乾性褐色森林土壌である。

A層は、10cm内外、B層は、固くしまっており、B層の下層は、5YRの色相に移行している。

林相は、常緑広葉樹が多く、数少ない都市林として、また、市民の憩いの場として大切に保存される必要がある。

代表断面 (地点番号 ⑧)

位置 小牧市 堀の内
 海拔高 70m 傾斜 30° 方向 E
 地質・地形 二層～三層紀
 小牧山の東側 尾根の中腹斜面

母材・堆積様式 チャート、 匍行土

林況 上層には、クスノキ、ハゼノキ、中層にはヒサカキ、サカキ (樹高5～6m)、地床には、マンリョウ、アオキ、アラカンの稚樹やシダがみられる。

断面状態 L: 0～3cm クスノキ、ヒサカキ等の落葉
 F: 0～1cm
 H: —

層位	厚さcm	層界	土性	礫	土色	腐植	構造	粗密度	粘り	水湿	根		備考
											草本	木本	
A	4～14	明	砂壤土	細角礫含む	暗褐～褐 (7.5YR ³ / ₄ 4 ₃)	含む	粉粒	粗	弱	乾	小根あり	小根含む 中根あり	
B ₁	46～56	瞭漸	〃	細角礫あり 小角礫あり 大角礫あり	明褐 (7.5YR ⁵ / ₈)	乏し	粒・堅果	密	強	〃	なし	小根含む 中根あり	
B ₂	40+	変	〃	小角礫あり	赤褐～明赤褐 (5YR ⁴ ～ ⁵ / ₈)	〃	なし	〃	〃	〃	なし	小根あり	

4) 平和統

本土壤統は、本図幅南東端の平和公園周辺部に位置し、名古屋南部図幅から続く土壤統で、7.5 YRの色相を有する乾性褐色森林土壤である。すべて丘陵性の地形で、土壤はかたくしまり、生産力は低い。周辺は、すべて市街地化している都会の公園として残される林地である。

代表断面 (地点番号 ⑨)

位置 名古屋市千種区田代町

海拔高 60 m 傾斜 22° 方向 S45°W

地質・地形 新第三紀 矢田川累層 丘陵性台地がゆるやかに南西方向に傾斜する斜面の中腹。

母材・堆積様式 シルト・砂・粘土、匍行土

林況 上層：コナラ13 m ヤマザクラ12 m モウソウチク12 m

中・下層：カナメモチ、ヒサカキ、ガマズミ

断面状態 L：2 cm コナラ・モウソウチク等の落葉枝

F：1 cm

H：0 cm

層位	厚さ cm	層界	土性	礫	土色	腐植	構造	粗密度	粘り	水湿	根		備考
											草本	木本	
A	10	明 瞭 漸 変	埴質壤土	中円礫 富む	黒褐 (7.5YR $\frac{3}{2}$)	富む	塊・粒	中	中	半乾	なし	小根富む	
B	16		微砂質壤土	なし	明褐 (7.5YR $\frac{5}{6}$)	乏し	—	密	弱	〃	〃	小根あり	
C	74+		〃	なし	明褐 (7.5YR $\frac{5}{6}$)	〃	—	〃	〃	〃	〃	なし	

2.2 台地及び低地域の土壌（農地土壌）

本図幅の農地土壌は、前述のように14の土壌統群に区分され、これは更に40の土壌統に細分される。この土壌統についてもそれぞれ土壌断面形態の特徴及び分布状況の概略を述べれば以下のとおりである。なお、土壌統一覧を■-1表に示した。

2.2.1 黒ボク土壌

1) 高尾統

腐植層の厚さが50cm未満のクロボク土壌で、第1層は腐植含量10%以上の多腐植層となっているものが多い。腐植層より下層は黄褐色で、時に灰色ないし灰褐色を呈する。土性はおおむね全層にわたって粘質であるが、壤質の層を挟むものも多い。

小牧市以北の排水のよい洪積台地の各所に分布し、土地利用は畑である。

2.2.2 多湿黒ボク土壌

1) 平田統

50cm以上ほぼ全層にわたって腐植層からなる土壌である。前述の黒ボク土壌より排水が悪いため酸化鉄の斑紋（斑鉄）が生成されている。表層が粘質のものもあるが、おおむね全層にわたって強粘質で一般に透水性が不良である。

小牧市の平坦な洪積台地上に分布し、土地利用は主として水田である。

2) 外山統

腐植層の厚さは50cm未満で、下層は黄褐色を呈し、マンガン結核が認められる。土性は粘質ないし強粘質であるが壤質の層を挟むものも多い。

小牧市の洪積台地の排水のやや悪いところに局部的に分布するにすぎない。土地利用は畑である。

3) 河内屋統

50cm内外の深さから礫層の出現する黒ボク土壌で、礫層の上部にも礫含

量の多いものがある。腐植層の下層は一般に黄褐色を呈し斑鉄が認められる。土性は粘質ないし強粘質である。

小牧市、大口町等の洪積台地に分布するが分布面積は少ない。畑利用が主体である。

2.2.3 褐色森林土壌

1) 池野統

黄褐色を呈する粘質の崩積土壌で、しばしば腐植含量の多い黒色ないし灰褐色の層を含むものがある。上層から下層に至るまで礫が多い。

犬山市東部の山麓斜面に分布し、排水がよいため樹園地としての利用が多い。

2) 野口統

池野統に類似するが、土性が壤質である点で異なる。

犬山市東部の山麓斜面に池野統に隣接して分布する。樹園地が多い。

2.2.4 赤色土壌

1) 篠岡R統

赤色ないし赤褐色を呈する粘質ないし強粘質の土壌である。下層は強粘質の場合が多く、一般にち密で植物根の伸長を妨げている。ところにより礫含量の多いものもある。作土下は酸性で塩基の乏しいせき薄な土壌である。

小牧市東部の第三紀丘陵地に分布し、野菜畑、樹園地として利用されている。

2) 西石田R統

50 cm内外の深さから礫層が出現し、黄色土壌の西石田統に類似する土壌であるが、土色が赤色ないし赤褐色を呈する点で区分される。一般に礫層の上部、作土層に至るまで礫が多いため耕起作業が困難である。土性は粘質ないし強粘質で作土下の化学性は篠岡R統と同様に不良である。

春日井市市街地北部の台地上に分布し、野菜畑、樹園地として利用されて

いる。

2.2.5 黄色土壤

1) 乙部統

黄色ないし黄褐色を呈する粘質土壤で、下層は強粘質のものが多い。作土下が一般にち密で作物根の伸長を阻害していること、透水性が不良なことなどが栽培上の阻害要因になっている。概して礫含量も多い。

本図幅北東部の丘陵地に分布し、野菜畑、樹園地が多いが、近年宅地化が進んでいる。

2) 西尾統

黄色ないし黄褐色を呈する粘質土壤で、乙部統に類似するが、堆積様式が乙部統は残積、西尾統は洪積である点が異なる。また粘土含量が西尾統の方がやや少なく、表層が壤質のものもみられる。

小牧市、名古屋市の一部に分布し、土地利用は畑である。

3) 西石田統

赤色土壤の西石田R統に類似するが、土色が黄色ないし黄褐色である点で区分される。

春日井市に西石田R統に隣接して分布する。普通畑及び樹園地が主体である。

4) 橋目統

黄褐色を呈する土壤で、表層に鉄の斑紋が、下層にマンガンの結核が認められる。土性は強粘質であるが、粘質の層を含むものがある。作土下は一般に透水性の悪いち密な層となっている。

小牧市から春日井市に至る平坦な洪積台地の水田地帯に分布し、土地利用の主体は水田であるが、畑化又は宅地化されたものも多い。

5) 東大高統

西尾統に類似するが、第2層以下に斑鉄の認められる点で区分される。普通畑として利用が多いが、排水性のやや不良な点が栽培上の阻害要因となっ

ている。

春日井市、小牧市の一部に、橋目統に隣接して分布する。

6) 大洞統

黄色ないし黄褐色を呈する粘質の土壤で、下層にマンガン結核が認められる。第1層又は下層の一部が壤質の層となっているものもある。また、下層に礫含量の多いものもある。

小牧市東部の丘陵地の一部に分布し、樹園地が多い。

7) 南下原統

50 cm内外の深さから礫層が出現する黄褐色の土壤である。土性は強粘質で礫層も粘礫層となっているものが多く、表層に斑鉄が、その下の層にマンガン結核が認められる。

春日井市北部の洪積台地上に分布し、主として水田として利用されている。

2.2.6 灰色台地土壤

1) 戸ヶ崎統

堆積様式は洪積であるが、排水の悪い地形に分布するため土色は灰褐色を呈する。下層が灰色又は黄褐色を呈する場合もある。土性は強粘質であるが、粘質の層を含む場合も多い。作土及びその直下の層に斑鉄が認められる。

大口町、小牧市、春日井市等各所に分布し、主として水田として利用されている。

2.2.7 褐色低地土壤

1) 下丸渕統

堆積様式は水積であるが、地下水位低く排水のよい地形に分布するため土色は黄褐色を呈する。土性は粘質であるが、下層の一部が砂質ないし壤質となっているものもみられる。酸化沈積物の斑紋は認められない。

祖父江町、稲沢市等の一部に分布し、野菜畑が主体である。

2) 福地B統

下丸洲統に類似するが、土性が壤質である点で区分される。

一宮市、稲沢市を中心に排水のよい沖積地の野菜栽培地帯に広く分布する。

3) 鶯多須B統

下丸洲統、福地B統に類似するが、土性が砂質の点で区分される。おおむね全層が均質な砂質層からなり、干害をうけやすいせき薄な土壌である。

江南市及び一宮市北部に分布し、野菜畑が多い。

4) 古知野統

50 cm以下の深さに礫層のある黄褐色の土壌で、土性は砂質ないし壤質である。

江南市の畑作地帯に分布するが、面積は少ない。

5) 中牧統

福地B統に類似するが、下層に斑鉄が認められる点で区分される。野菜畑が多いが、多雨期には湿害が発生しやすい。

祖父江町に分布する。

2.2.8 細粒灰色低地土壌

1) 大治統

おおむね全層にわたって灰色を呈する粘質の土壌であるが、第1層(作土層)が壤質、また、下層の一部が強粘質となっているものもある。斑鉄は全層に認められ、表層では膜状ないし糸根状、下層では管状の斑鉄が多い。

水田土壌としては肥よく度の高い部類に属するが、排水がやや不良である。

図幅内各所の沖積水田地帯に広く分布する。

2) 国府宮統

大治統に類似するが、第2層(すき床層)以下にマンガン結核の認められる点で区分される。

主として稲沢市から小牧市にかけての沖積水田地帯に分布する。

3) 久保統

灰褐色の強粘質土壌で、大治統より地下水の影響が少ないため、沖積地に

分布する水田としては比較的乾きやすい。表層又は下層の一部が灰色を呈するもの、下層の一部が壤質又は粘質のものなどもみられる。

水稲栽培上の障害因子が少なく、生産力の高い土壌である。

主として小牧市、犬山市に分布し、土地利用は主として水田である。

4) 金田統

久保統に類似するが、粘土含量がやや少なく、土性の点で区分される。また、畑地帯に分布するため、斑鉄も久保統より少ない。

名古屋市北部の一部に分布し、主として野菜畑として利用されている。

2.2.9 灰色低地土壌

1) 針曽根統

おおむね全層にわたって灰色を呈する壤質の土壌で、斑鉄は表層から下層にわたって生成されている。下層に砂層の出現するものもある。肥よく性は一般に大治統、国府宮統より劣る。

沖積地の各所に広く分布し、土地利用は主として水田である。

2) 桑ヶ谷統

針曽根統に類似するが、第2層ないし第3層にマンガン結核の認められる点で区分される。また、下層の一部が粘質の層となっているものも多い。

図幅内各所の沖積平たん地に広く分布する。土地利用は主として水田であるが、野菜畑等畑利用も多い。

3) 福地統

針曽根統と同じ灰色の壤質低地土壌であるが、鉄、マンガン等の酸化沈積物の生成が認められない土壌である。針曽根統、桑ヶ谷統より地下水位が低く、排水のよいところに分布する。

沖積地のうち排水のよい集落周辺に分布が多く、野菜畑等畑地として利用されている。

2.2.10 粗粒灰色低地土壌

1) 上細池統

おおむね全層が砂質層からなる灰色の土壌である。表層の作土層及びすき床層のみが壤質のものも多い。表層には斑鉄が認められるが、一般に下層には少ない。水田として利用されているが、水持ちが悪くてせき薄な土壌である。

図幅中西北部の河川沿いに分布する。

2) 大草統

50 cm内外の深さから礫層の出現する土壌で、礫層は砂礫層となっているものが多い。表層は壤質ないし粘質である。

主として名古屋市の庄内川、矢田川沿いに分布し、水田利用が多い。

3) 羽黒統

大草統に類似する礫層土壌であるが、礫層の出現位置が浅く、30 cm以内である。漏水田が多く、生産力が低い。

大口町、小牧市等に分布し、土地利用は主として水田である。

2.2.11 細粒グライ土壌

1) 米津統

地下水位が高く排水が悪いため、作土直下からグライ層が出現する粘質土壌である。グライ層には斑鉄は生成されていない。この土壌は肥よく性は高いが、水稻の根ぐされが生じやすいこと、耕起碎土等の機械作業が困難なことなどが阻害要因になっている。

低湿の沖積水田地帯に分布の多い土壌であり、本図幅では佐織町の一部に分布するにすぎない。

2) 刈屋統

米津統に類似するが、斑鉄が30 cm以下のグライ層にまで認められる点で区分される。

主として津島市の水田地帯に分布する。

志籠谷統、米津統、苅屋統より地下水位のやや低い地帯に分布するため、グライ層の出現位置は低く、50 cm内外となっている。粘質の土壤で、斑鉄の生成が多い。

図幅内各所の水田地帯に分布する。

2.2.12 グライ土壤

1) 寺津統

作土直下からグライ層が出現する壤質の土壤で、地下水位高く排水の悪い地形に分布する。作土及びすき床には斑鉄が認められるが、グライ層には斑鉄の生成はみられない。米津統と同様に水稻の根ぐされの多い土壤である。

図幅内南西部の低湿水田地帯に多く分布する水田の代表的な土壤統である。

2) 山路統

寺津統に類似するが、30 cm以下のグライ層にも斑鉄が認められる点で区分される。

主として津島市、美和町に分布し、土地利用は水田である。

3) 開正統

寺津統、山路統に比較して地下水位がやや低いところに分布するため、グライ層は50 cm内外の深さから出現する。土性はおおむね全層にわたって壤質であるが、下層に粘質層を挟むものもある。

代表的な水田土壤の一つで、図幅中西南部水田地帯の各所に広く分布する。

2.2.13 粗粒グライ土壤

1) 西小椰統

おおむね全層にわたってグライ層からなる砂質の土壤である。斑鉄は上層に認められるが、その量は一般に少ない。せき薄な土壤で水稻の根系障害も多く、水稻生産力は低い。

木曾川下流部の沿岸の低湿水田地帯に分布する。

2) 平坂統

西小椰統に類似するが、グライ層が低く、50 cm内外の深さに出現する。
木曾川、日光川の上流部沿岸の水田地帯に分布する。

2.2.14 黒泥土壌

1) 北高井統

おおむね30～50 cm以下が黒泥層からなる土壌である。表層の腐植含量も概して高い。土性は粘質ないし強粘質で斑鉄及びマンガン結核が認められる。

一宮市、小牧市に分布し、土地利用は水田である。

Ⅲ-1表 土 壤 統 一 覧

土壌群	土壌統群	土壌統	土色	腐植層	疎層	土 性		グライ層	酸化沈積物	堆積様式	土地利用	備 考	
						表 層	次 層						
黒ボク土	黒ボク土壌	高 雄	黒/黄褐	表層腐植層	なし	壤~粘質	壤~粘質	なし	なし	洪積	畑		
		多湿黒ボク土壌	平 田	黒	全層腐植層	〃	粘~強粘質	強粘質	〃	あり	〃	水田	腐植層の厚さ50cm以上、斑鉄あり
	多湿黒ボク土壌	外 山	黒/黄褐	表層腐植層	〃	粘 質	壤~粘質	〃	〃	〃	〃	畑	マンガン結核あり
		河内屋	〃	〃	あり	〃	粘 質	〃	〃	〃	〃	〃	50cm内外より以下疎層、斑鉄あり
褐色森林土	褐色林土壌	池 野	黄 褐	なし	なし	〃	〃	〃	なし	崩積	〃		
		野 口	〃	〃	〃	壤 質	壤 質	〃	〃	〃	〃		
赤黄色土	赤色土壌	藤岡R	赤~赤褐	〃	〃	粘 質	粘~強粘質	〃	〃	残積	〃		
		西石田R	〃	〃	あり	〃	〃	〃	〃	〃	洪積	〃	50cm内外より以下疎層
	黄色土壌	乙 部	黄~黄褐	〃	なし	〃	〃	〃	〃	〃	残積	〃	
		西 尾	〃	〃	〃	〃	壤~粘質	〃	〃	〃	〃	洪積	〃
		西石田	〃	〃	あり	粘 質	〃	〃	〃	〃	〃	〃	50cm内外より以下疎層
		橋 目	黄 褐	〃	なし	粘~強粘質	〃	〃	あり	〃	水田	斑鉄、マンガン結核あり	
		東大高	黄~黄褐	〃	〃	粘 質	粘~強粘質	〃	〃	〃	〃	畑	斑鉄あり
		大 洞	〃	〃	〃	壤~粘質	粘 質	〃	〃	〃	残積	〃	マンガン結核あり
		南下原	黄 褐	〃	あり	強粘質	強粘質	〃	〃	〃	洪積	水田	50cm以下に疎層あり、斑鉄・マンガン結核あり
灰色台地土	灰色台地土壌	戸ヶ崎	灰 褐	〃	なし	粘~強粘質	粘~強粘質	〃	〃	〃	〃	斑鉄あり	
褐色低地土	褐色低地土壌	下九洲	黄 褐	〃	〃	粘 質	粘 質	〃	なし	水積	畑		
		福地B	〃	〃	〃	壤 質	壤 質	〃	〃	〃	〃		
		鶴多須B	〃	〃	〃	砂 質	砂 質	〃	〃	〃	〃		
		古知野	〃	〃	あり	砂~壤質	砂~壤質	〃	〃	〃	〃	〃	50cm以下に疎層あり
		中 牧	〃	〃	なし	壤 質	壤 質	〃	あり	〃	〃	〃	斑鉄あり
灰色低地土	細粒灰色低地土壌	大 治	灰	〃	〃	粘 質	粘~強粘質	〃	〃	〃	水田	斑鉄あり	
		国 府 宮	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	斑鉄・マンガン結核あり	
		久 保	灰 褐	〃	〃	粘~強粘質	〃	〃	〃	〃	〃	斑鉄あり	
		金 田	〃	〃	〃	壤~粘質	粘 質	〃	〃	〃	畑	斑鉄あり	
	灰色低地土壌	針曾根	灰	〃	〃	〃	壤~粘質	壤 質	〃	〃	〃	水田	斑鉄あり
		桑ヶ谷	〃	〃	〃	〃	壤 質	〃	〃	〃	〃	水田・畑	斑鉄・マンガン斑あり
		福 地	〃	〃	〃	〃	〃	壤 質	〃	なし	〃	畑	

土壌群	土壌統群	土壌統	土色	腐植層	礫層	土性		グライ層	酸化物沈着物	堆積様式	土地利用	備考
						表層	次層					
	粗粒灰色低地土壌	上細池	灰	なし	なし	砂～壤質	砂質	なし	あり	水積	水田	斑鉄あり
		大草	〃	〃	あり	壤～粘質	壤～砂質	〃	〃	〃	〃	斑鉄あり、30～60cm以下礫層
		羽黒	〃	〃	〃	粘質	-	〃	〃	〃	〃	斑鉄あり、30cm以内より礫層
グライ土	細粒グライ土壌	米津	青灰	〃	なし	〃	粘～強粘質	あり	〃	〃	〃	作土直下からグライ層、30cm以下に斑鉄なし
		刈屋	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	作土直下からグライ層、30cm以下に斑鉄あり
		志麗谷	灰/青灰	〃	〃	〃	粘質	〃	〃	〃	〃	50cm内外からグライ層斑鉄あり
	グライ土壌	寺津	青灰	〃	〃	壤質	壤質	〃	〃	〃	〃	作土直下からグライ層、30cm以下に斑鉄なし
		山路	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	作土直下からグライ層、30cm以下に斑鉄あり
		開正	灰/青灰	〃	〃	〃	壤～粘質	〃	〃	〃	〃	50cm内外からグライ層、斑鉄あり
	粗粒グライ土壌	西小郷	青灰	〃	〃	砂質	砂質	〃	〃	〃	〃	作土直下からグライ層、斑鉄あり
平坂		灰/青灰	〃	〃	砂～壤質	砂質	〃	〃	〃	〃	50cm内外からグライ層、斑鉄あり	
泥炭土	黒泥土壌	北高井	黒色	なし	〃	粘～強粘質	粘～強粘質	なし	〃	〃	〃	50cm以内より黒泥層、斑鉄・マンガン結核あり

Ⅳ 土地利用の現況

名古屋北部および津島図幅に含まれる28市町村の土地利用の現況と最近の動向を、土地利用現況図およびⅣ-1表からみると、以下のように要約出来る。

まず北西部および南東部に市街地および住宅地の展開が目立つのが、本図幅の特徴である。特に南東部および東部地域は、名古屋市に隣接もしくは近接し、市街地が、名古屋市の市街地と連なっている。甚目寺町、新川町、清洲町、西枇杷町、西春町、師勝町、豊山町および春日井市等がこれである。これらの市町村では、市街地化、工場地化、宅地化とそれに伴う農地転用および人口増加が著しい。ちなみに本図幅に含まれる28市町村の宅地面積をみると、1970～80年の間に、15,186haから19,073haへと26%増加したのに対し、経営耕地面積は、28,606haから21,120haへと26%減少した。それは、名古屋市、春日井市、江南市、西枇杷島町、新川町に顕著で、減少率は、いずれも30%から40%にも昇っている。なかでも近年名古屋市の住宅都市的性格を強めた春日井市の場合、この傾向がとりわけ顕著で、経営耕地面積は、同期に2,066haから1,244haへと40%の減少を、一方、住宅地面積は1,025haから、1,799haへと大幅に増加し、人口も16,1835人から24,419人へと増大した。

工場がかなりの展開を示していることも本図幅の大きな特徴の1つである。それは、名古屋市北部とその周辺市町村に著しい。これは、当地域が中部地方の交通の要所となっており、東西南北に、名神高速道路、国道22号線を始めとする道路および東海道新幹線、東海道本線をはじめとする鉄道等が走っているからでもある。すなわち小牧インターを始めとする各インターチェンジ等が道路の、稲沢操車場が鉄道貨物の、名古屋空港が空からの中京地域への出入口となっており、例えば貨物輸送の根幹をなすトラックターミナルは、小牧インター南西部に位置するのである。したがって工場立地は、主として名神高速道路の小牧インター周辺、名古屋空港周辺、東海道本線並びに中央本線の国鉄沿線等の主要幹線交通路沿いおよびその周辺地域並びに、名古屋市北部を中心と

する各市町村の市街地、例えば一宮市および尾西市の市街地等に展開している。1981年の製造品出荷額が1,000億円を超える市町村は、次の11市町に昇っている。名古屋市(41,805億円)では輸送用機械、小牧市(4,679億円)では一般機械、春日井市(4,426億円)では電気機械、一宮市(3,999億円)では繊維、犬山市(2,414億円)では食料品、大口町(2,065億円)では一般機械、新川町では食料品、西枇杷島町では一般機械、江南市では繊維が第1位の業種となっている。重工業では輸送用、一般および電気機械、軽工業ではパルプ、繊維および食料品製造が重要である。また近年の工業面積の動向をみると、1970~80年の間に、3,452haから2,979haへと14%の減少を示した。名古屋市(同期に1,593haから1,188haへ)、一宮市(同206haから147haへ)、春日井市(同271haから257haへ)、津島市、江南市、稲沢市、師勝町、西春町、清洲町、木曾川町、祖父江町、平和町、佐織町等の市街地化したもしくは繊維工業都市では減少が、一方、新興の工場進出が目立つ犬山市(同170haから206haへ)、小牧市(同259haから291haへ)、岩倉市、豊山町、春日村、新川町、大口町、甚目寺町、大治町立田村では増加がみられた。

またこれらの市街地には、とりわけ本図幅の南東部に位置した名古屋市を中心に、文教および公園緑地の展開もみられる。ちなみに公園緑地については、名城公園、平和公園および庄内川の庄内緑地が目立っている。

一方、農地については、本図幅の北東部から南西部に至る地域に大きく展開している。本図幅の北東部地域では、尾張平野が東から西へ傾斜していることもあって、丘陵地に山林(主として針葉樹を中心に)もみられるが、それにも増して水田および果樹園の展開が目立つ。果樹栽培については、とりわけ春日井市、犬山市に目立ち、その主要な作目はもも、ぶどうおよびかきとなっている。ちなみに1983年の生産状況をみると、春日井市ではももが、個別農産物粗生産額の第2位を占め、その構成比は10%となっている。

さらに本図幅の北部から中央部地域では、市街地と宅地化にも増して、農地とりわけ畑地と水田の存在が目立つ。特に畑地の利用については、名古屋を中

心とした近郊農業的色彩が強く、軟弱野菜栽培を中心に、極めて集約的な経営が営まれて来た。ほうれんそう、えだまめ、にんじん、いちご、ごぼう等の栽培がこれに当る。例えば1982年の農業粗生産額構成比をみると、清洲町および春日村では、ともにほうれんそうが、27%および16%と第1位を占めている。

さらに本図幅の西部地域では、標高が極めて低く、最近まで宅地化の進展が比較的軽微であった。これは交通網の整備の遅れたこと、制度的には農振地域としての指定を受けていたこと、またかつて小作争議が激しく、土地所有権が強かったこと等による。土地利用については、自然堤防等の微高地を中心に集落や畑地や樹園地の展開がみられ、その周辺は、バックマーシュとして水田地域となっている。その景観は、特に日光川、領内川、三宅川沿いに見事にみられる。畑地では、ネギ、ピーマン等を中心とする野菜栽培が盛んである。また樹園地は、とりわけ稲沢市、祖父江町等を中心にみられ、そこでは庭園樹用の苗木生産が盛んである。一方低湿地は、一般に水田として利用され、多くの市町村では、水稻が農産物粗生産額の第1位を占めている。例えば前述の稲沢市においても、1982年の水稻の粗生産額構成比は20%と第1位を占め、庭園樹苗木生産のそれは15%と第2位にとどまっている。またこれらの低湿地では、れんこん栽培も盛んで、霞ヶ浦地域と並ぶ全国の主要産地となっている。それはとりわけ立田村および八開村に顕著で、れんこんの粗生産額は、それぞれ23%および26%と、構成比の第1位を占めている。

近年これらの低湿地においても工場地化、宅地化が、地価の安いことと相俟って進展しているが、たとえ大幅に盛土がなされたとしても、このことが遊水池機能を大幅に減少させ、優良農地の損失のみならず、防災という点からも大いに問題があろう。

参 考 文 献

- 青野寿郎・尾留川正平編（１９６９）、『日本地誌第１２巻、愛知県・岐阜県』、
二宮書店
- 安藤萬寿男・伊藤郷平・佐々木清治・山岡政喜編（１９６９）、『日本地誌ゼ
ミナールⅤ 東海地方』、大明堂
- 中日新聞開発局編（１９７６）、『愛知百科辞典』、中日新聞本社
- 北村修二（１９８４）、『愛知県における酪農業の展開』、名古屋大学文学部
論集・史学３０
- 春日井市役所企画部編（１９８４）、『春日井市史地区誌編１』、春日井市役
所

Ⅳ－1表 地目別土地利用及び農業経営の状況

		農家数	経営耕地面積				森林面積	工業用地面積	住宅地面積
			総計	田	畑	樹園地			
名古屋市	1970年	10256 戸	4429 ha	3187 ha	933 ha	74 ha	2107 ha	1593 ha	7252 ha
	1980年	7642	2669	1535	989	145	1945	1188	8999
一宮市	1970年	7843	3559	2239	1287	32	—	206	1823
	1980年	6655	2633	1776	829	27	—	147	1726
春日井市	1970年	4887	2066	1478	418	171	2219	271	1025
	1980年	3858	1244	856	268	120	1753	257	1799
津島市	1970年	1737	1268	1137	117	14	—	52	374
	1980年	1596	1084	974	102	7	—	46	516
犬山市	1970年	2569	1321	917	144	261	3615	170	393
	1980年	2298	956	705	128	123	3525	206	600
江南市	1970年	2839	1144	245	744	155	—	111	593
	1980年	2317	735	165	535	34	—	90	557
尾西市	1970年	2043	924	693	227	4	—	52	313
	1980年	1842	727	552	168	7	—	52	439
小牧市	1970年	3590	1959	1451	339	169	833	259	616
	1980年	3259	1372	1038	229	106	878	291	859
稲沢市	1970年	4484	2481	1639	829	13	—	198	621
	1980年	4187	2157	1356	520	281	—	192	742
岩倉市	1970年	1024	535	370	162	3	—	36	169
	1980年	860	361	258	103	1	—	37	219
西枇杷島町	1970年	181	59	47	12	0	—	42	95
	1980年	154	41	29	12	0	—	42	107
豊山町	1970年	570	204	194	10	0	—	31	69
	1980年	513	153	143	9	0	—	32	70
師勝町	1970年	761	395	298	91	6	—	22	136
	1980年	707	298	236	57	6	—	20	220
西春町	1970年	887	468	343	123	2	—	31	144
	1980年	793	348	256	86	5	—	25	246
春日村	1970年	361	217	132	84	1	—	10	36
	1980年	337	156	93	63	1	—	11	47
清洲町	1970年	480	244	173	70	1	—	19	84
	1980年	408	163	108	55	1	—	13	99

		農家数	経営耕地面積				森 林 面 積	工業用 地面積	住宅地 面 積
			総 計	田	畑	樹園地			
新 川 町	1970年	343 戸	140 ha	97 ha	43 ha	0 ha	- ha	56 ha	76 ha
	1980年	297	90	58	32	0	-	60	93
大 口 町	1970年	1231	700	484	120	96	-	86	108
	1980年	1090	547	401	121	25	-	91	138
木曾川町	1970年	832	335	249	85	1	-	35	153
	1980年	677	253	207	45	1	-	31	197
祖父江町	1970年	1880	1193	754	318	121	26	81	201
	1980年	1738	973	592	345	37	-	53	242
平 和 町	1970年	862	536	372	138	26	-	13	113
	1980年	795	445	293	144	8	-	12	125
七 宝 町	1970年	873	474	420	54	0	-	5	121
	1980年	810	364	325	38	1	-	5	155
美 和 町	1970年	913	609	491	117	1	-	10	130
	1980年	839	499	396	100	4	-	10	179
甚目寺町	1970年	790	438	340	98	0	-	21	148
	1980年	703	348	274	75	0	-	25	199
大 治 町	1970年	679	317	249	68	0	-	16	80
	1980年	640	237	175	61	0	-	22	128
立 田 村	1970年	1080	1233	1072	155	6	-	6	97
	1980年	1042	1125	970	149	6	-	7	115
八 開 村	1970年	774	720	501	210	9	-	x(秘とく)	84
	1980年	726	617	417	170	29	-	0	100
佐 織 町	1970年	923	638	479	159	0	-	20	132
	1980年	887	525	389	132	3	-	14	157

備考：農家数、経営耕地面積は1970年及び1980年の農林業センサスによる。森林面積、工業用地面積及び住宅地面積は愛知県企画部資料による。

1986年3月 印刷発行

愛知県土地分類基本調査

津島・名古屋北部

編集発行	愛知県企画部土地利用調整課 〒460 名古屋市中区三の丸三丁目1番2号
印刷	東洋地図株式会社 〒462 名古屋市北区猿投町38の3